

**平成 29 年度 南相馬市地域課題解決調査研究事業**  
**「継続的な放課後児童クラブ支援による地域の居場所づくり」**  
**報告書**

**新潟県立大学南相馬市子ども支援プログラム**

## 1. プログラムの背景

東日本大震災が発生した7年前から、新潟県内には、福島県南相馬市からの避難者や子どもが多く、なかには保護者の仕事の都合により帰郷する子どもたちも少なかった。このような背景から、私たちは南相馬市に戻ってゆく子どもたちへの支援活動が必要であると判断し、以来これまで子ども支援プログラムを実施してきた。とくに福祉的ニーズがあると判断される放課後児童クラブ（留守家庭児童）への支援が主な内容である。

新潟県立大学植木研究室は、南相馬市教育委員会との合意文書（2011年5月）に基づいて、これまで約100回程度、新潟から南相馬市へ直接現地入りして、南相馬市子ども支援プログラムを継続してきた。

## 2. プログラムの目的

平成28年度調査研究事業において、子ども支援者による子どもへのかかわりを意識した寄り添い重視の子ども支援プログラムを実施し検証した。その結果、被災地においては、継続的な子ども支援プログラムが必要であることがわかった。一方で、プログラムの実施場所を原町区・鹿島区の放課後児童クラブに限定したことから、対象が限定され、小高区を含めた地域のすべての子どもたちを対象としたプログラムとして検証することができなかった。

そこで、平成29年度調査研究事業においては、対象を地域のすべての子どもたちに拡大することにした。具体的には、小高区に新たに設置された小高合同児童クラブを子ども支援対象に含め、すべての子どもを対象に継続的に支援することにした。

これらのプログラムを検証することにより、継続的な放課後児童クラブ支援による地域の居場所モデルを開発することを目的とする。

## 3. 倫理的配慮

プログラム期間中は、みなみそうま復興大学フェイスブックのイベントページに写真を掲載するため、あらかじめ、南相馬市教育委員会事務局幼児教育課から各児童クラブをとおして、保護者の許可を得て掲載した。

## 4. これまでに実施したプログラムの概要

南相馬市教育委員会と子ども支援プログラムの展開で合意文書(2011年5月18日付)を交わし、遊びのプログラムなどで小学生たちとかがわることができるようになった。これにより南相馬市児童クラブの子どもと放課後児童支援員を対象に支援を継続することが可能になった。大学生スタッフが、南相馬市内の児童館・児童クラブへ分散して訪問することができ、子どもたちとの継続的な「またね」の約束をはたすことができた。

以上のような継続性が約束された子どもたちとのかかわりが、互いの信頼関係を育み、7年目以降の支援プログラムへの期待につながっている。

7年目の支援プログラムにおいては、原町区、鹿島区のみならず、小学校を再開した小高区に対象を拡大しながら、継続的な支援を実施することにした。このようなプログラムの実施により、子どもたちのエンパワメント（潜在能力の顕在化）を高める効果が期待できるのではないかと考えている。そして、プログラムの目的をはたすために、新潟県立大学スタッフによる放課後児童クラブ放課後児童支援員への定期的なスーパービジョンのほかに、大学生スタッフによる子ども支援を主とする子ども支援プログラムを計画した。

## 5. プログラムの実施内容

平成29年度は、第1期（9月）と第2期（3月）にわたって事業を実施した。第1期事業の実施をふまえて、継続事業となる第2期事業の効果測定を実施した。詳細は以下のとおりである。

### （第1期）

平成29年9月7日（木）～9日（土）

スタッフ29名

東町児童クラブ1・2、原町第一児童クラブ、橋本町児童クラブ、上町児童クラブ1・2、石神第一児童クラブ、石神第二児童クラブ、太田児童クラブ、大甕児童クラブ、鹿島児童クラブ1・2、上真野児童クラブ、八沢児童クラブ、小高合同児童クラブ

### （第2期）

平成30年3月1日（木）～3日（土）

スタッフ29名

東町児童クラブ1・2、原町第一児童クラブ、橋本町児童クラブ、上町児童クラブ1・2、石神第一児童クラブ、石神第二児童クラブ、太田児童クラブ、大甕児童クラブ、鹿島児童クラブ1・2、上真野児童クラブ、八沢児童クラブ、小高合同児童クラブ

### （1）放課後児童クラブ支援

南相馬市における地域の居場所づくりのために、既存の社会資源として現存する放課後児童クラブを活用した。南相馬市内には、教育委員会が直轄する放課後児童クラブが12か所15クラブあり、地域の健全育成の拠点として根付かせることの有効性を検証するために、新潟県立大学による継続的な放課後児童クラブ支援を実施した。そのために、福祉系の教員と大学生で組織されるスタッフを派遣し、放課後児童クラブの職員である放課後児童支援員とともに子ども支援にあたった。

具体的には、児童福祉等を専門とする大学教員による放課後児童支援員への助言指導と、放課後児童クラブへの大学生の派遣による子ども支援事業を実施した。



### （2）交流おやつタイムの実施

すべての放課後児童クラブを対象に、交流おやつタイムを実施することで、子どもたちの豊かな放課後の生活づくりを支援した。

その際、おやつパッケージを届けるだけではなく、「コープにいがた」組合員や子ども支援スタッフの協力を受けながら、「大型絵本の読み聞かせ（かわいそうなぞう）」を実施することで、子どもとおとなが交流する「交流おやつタイム」を実施することができた。具体的には、新潟県立大学が、コープにいがたおよび南相馬市教育委員会と協同して、放課後児童クラブ（15 クラブ約 650 名）を訪問し、「交流おやつタイム」を実施した。

南相馬市においてコープにいがたとの協同は、支援を要する子どもたちに安全・安心なおやつパッケージを届けてくれる団体として、被災地で高い信頼を得ていることがわかった。さらに、南相馬市教育委員会との協同は、対象となる被災地の子どもたちとの信頼関係の構築に寄与することがわかった。このような多様な団体との協同により、安全・安心なおやつパッケージを届けて交流することに「交流おやつタイム」の重要な意味があることがわかった。



## 6. 大学生スタッフによる振り返り

南相馬市で生きてゆくことを決意した子どもたちにとっては、大学生スタッフのかかわりによって、近い将来のロールモデルとしての「キラキラしたお姉さんお兄さん」として映るかもしれない。そこから子ども自身も「もしかして自分もキラキラお姉さんお兄さんになれるかもしれない」という、将来への希望を描いてほしいと心から願っている。

以下、参加した大学生スタッフが残した記録の抜粋と、それらに対する南相馬市の児童館・放課後児童クラブの放課後児童支援員からのコメントの抜粋を紹介する。

### （1）大学生スタッフのコメント（抜粋）

「何をしても友だちとの会話、笑顔が絶えない子どもたちの姿に絆の強さを感じました。」

「知っている顔がいることの安心感や、“また ” 会えたという経験は、子どもたちにとって大きな力になると感じました。また、子どもたちの潜在的な力を学生スタッフによって引き出すことができたのではないかと思います。絶対また来ます！」

「次いつ来るの？とってくれた子もいるので、また来たいと思いました。」

「自分が何度も言った『またね』という言葉を守れるよう次回もぜひ参加したいと思いました。」

「私のことを知っている子どもたちは、私の名前を呼んで駆け寄って来てくれて、とても嬉しかったです。数か月会っていない程度でしたが、みんな背も高くなりおとなびた印象を受けました。」

「前回会った子どもたちが、自分のことを覚えてくれており、すぐに打ち解けたようすを見せてくれたことに喜びを感じました。」



「最後にまた来てねと言われて絶対にまた来たい！と思いました。子どもたちは本当に素直で次に来るときまでもっと自分も成長したいと思いました。」

## (2) 南相馬市の放課後児童支援員からのコメント (抜粋)

「皆さんが帰った後『また会えるかな？また会いたいな』と名残惜しんでいる児童が多く、(子ども直筆の)手紙も自発的に書きたいと書いたものでした。」

「事前に大学生が来館される旨の話は子どもたちにしていたので、皆楽しみにしていたようでした。特に去年のプログラムに参加して顔を知っている児童は、再会を喜んでいました。『また来てね!』『元気でね』と再会を約束した子どもたち。充実した期間でした。」

「児童クラブは、限られた空間、不便な環境の中で子どもたちとつくり上げてきました。そのあたたかい雰囲気を感じていただけて、うれしく思います。子どもたちも心から楽しく過ごすことができました。子どもたちへの接し方を見て、私たち頬かご児童支援員もあらためて感じるものがありました。」

「子どもたち一人ひとりの要望に丁寧に応えてくれてありがとうございました。素敵なお兄さんとお姉さんに、自分の気持ちに伝えてもらえたことと、その時感じた『うれしい気持ち』は、子どもたちにとって最大の支えになると思います。優しい気持ちをありがとう！また会おうね！」



## 7. プログラムの結果

東日本大震災から7年が経過したとはいえ、被災地における子ども支援は、継続的、重層的にかかわることが必要である。そのために、複数回の連続プログラムにしたことは有効だった。さらに、コープにいがた、南相馬市教育委員会など複数の団体と協働することは、重層的な子ども支援を実施するにあたって重要であった。被災地子ども支援プログラムを継続的に進めるためには、継続的、重層的なプログラム担保されることが必要であることを痛感した。

南相馬市の放課後児童クラブは、小学校や児童センターに併設されていることが多く、地域のさまざまな人たちが集うことのできる地域の社会資源であり居場所である。とくに小高区は放課後児童クラブと放課後子供教室が同じ場所で実施されており、小高区を含めた南相馬市内の放課後児童クラブ等が地域交流の居場所になれば、地元のおとなたちが継続的に地域の子どもたちにかかわることができ、継続的、重層的な地域の居場所モデルとなる。

また、子ども支援スタッフの派遣による地域の居場所づくりは、調査研究事業終了後も引き続き展開される。これらの事業は南相馬市教育委員会(事務局幼児教育課)と連携して実施することになるため、現地での定着が見込まれる。

このように、将来的には、南相馬市教育委員会主催の事業プログラムへと発展させることが可能であり、今後の継続性を担保するために、引き続き調査研究事業の実施が必要である。



(植木信一：新潟県立大学人間生活学部子ども学科)